報道関係者各位

2026年1月27日

日本・ネパール外交関係樹立70周年記念事業

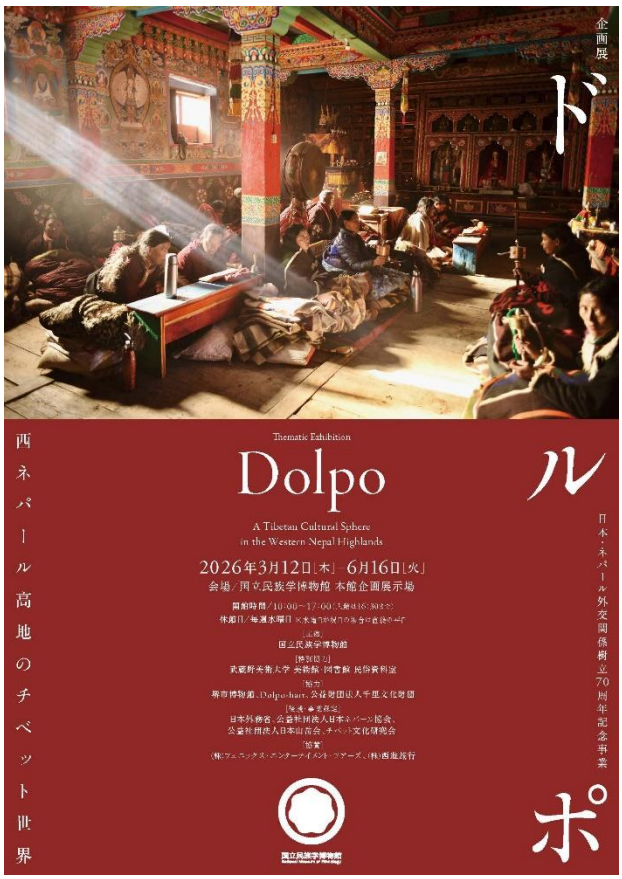
企画展「ドルポ――西ネパール高地のチベット世界」

Thematic Exhibition

“Dolpo：A Tibetan Cultural Sphere in the Western Nepal Highlands”

2026年3月12日(木)～6月16日(火)

国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博公園10-1）では、企画展「ドルポ――西ネパール高地のチベット世界」を2026年3月12日(木)～6月16日(火)まで開催します。



【展覧会について】

ドルポとは、西ネパールのダウラギリ山群北西に位置する、域内の9割が標高3,500m以上という高地の地名です。ここは国境をはさんでチベット（中国）と接するチベット文化圏で、四方どこからでも標高5,000m以上の峠を越えなければ到達できない隔絶した「天界」です。チベット系のドルポパ（ドルポの人、域内人口約5,100人、2021年）と呼ばれる人びとは、農耕と牧畜、ヒマラヤ越えの交易を組み合わせた生業を営み、チベット仏教や仏教到来以前のポン教を信仰しながら暮らしてきました。本企画展では、この地をくまなく歩いてきた異色の美容師・ドルポ探求家・写真家である稲葉香が撮影した現在の写真と、本館および武蔵野美術大学所蔵の過去の民族資料などを展示して、ドルポのくらしとその約半世紀の変容の軌跡を探ります。

展示趣旨

ドルポ（当時はトルボ）の名がはじめて世に出たのは、1900 年にここを通ってチベットに潜入した河口慧海（1866～1945 年）の『西蔵旅行記』（1904 年）とその英訳本 *Three Years in Tibet*（1909 年）の記載からでした。ドルポと日本人の関係は深く、その後も日本人研究者や登山家が訪ねてきました。チベット動乱前年の 1958 年、川喜田二郎（1920～2009 年）を隊長とする西北ネパール学術探検隊がツァルカ村で約 3 カ月の調査をしました。1968 年には、田村善次郎（1934 年生）を隊長とする西部ネパール民族文化調査隊がポンモ村で約 2 カ月間、調査をしました。両隊はともに文化人類学的な調査のかたわら民具を収集しており、前者は本館に、後者は武蔵野美術大学 美術館･図書館 民俗資料室に所蔵されています。

本企画展ではこれらの資料を展示し、ヒマラヤ越えの交易民（トランス・ヒマラヤ・トレーダー）と呼ばれてきたドルポパのくらしと、その約半世紀の変容の軌跡を探ります。ドルポの過去を現在につなぐのは、ドルポをくまなく踏破してきた美容師・ドルポ探求家・写真家である稲葉香が撮影した写真です。一見すると、約半世紀を経たくらしぶりはあまり変わっていないように映るかもしれません。しかし、ドルポパは 1959 年のチベット動乱をはじめとするさまざまな政治生態学的な動向に翻弄されながら、交易圏や生業の組み合わせを柔軟に変え、教育に投資するなど、しなやか、かつしたたかに時代の荒波を生きてきました。ドルポの家畜とともにあるくらし、多くの寺や僧院と厚い信仰心、ほぼ消滅したヒマラヤ越えの中継交易とそれにとって代わる冬虫夏草採取ブームなど、ネパール高地のチベット世界の半世紀にふれてください。

本展のみどころ

ドルポのほぼ全ての20数村を歩いている稲葉香の写真は、本展示のみどころのひとつです。これまで稲葉の作品がこれほどまとまった形で展示される機会はありませんでした。また、1958年に西北ネパール学術探検隊により収集された資料（本館所蔵）と、1968年に西部ネパール民族文化調査隊により収集された資料(武蔵野美術大学所蔵）もみどころです。これらは1959年のチベット動乱前後に、数カ月の住み込み調査のなかで収集されたもので、民族誌的情報が豊かであり世界的に見ても極めて貴重なものです。他にも、河口慧海直筆の日記（堺市博物館蔵)、京大式カードやKJ法の原点ともいえる西北ネパール学術調査隊のデータカード（本館アーカイブ所蔵）は歴史的に貴重な資料です。

関連イベントとして4月12日にみんぱく映画会において上映する、西北ネパール学術探険隊の記録映画『秘境ヒマラヤ』(1960年／大森栄撮影／西北ネパール学術探険隊監修／読売映画社・現（株)イカロス制作）もみものです。今回、上映権者の許諾を得て、国立映画アーカイブ所蔵のフィルムを独自にデジタル化して映写します。

資料点数　約220点

展示構成

イントロダクション

展示の趣旨を伝え、ドルポとそこにくらす人びと、ドルポパについて解説します。

第 1 部 稲葉香がみたドルポ

冬に低地の放牧地に移動（2019 年、稲葉香撮影）

ドルポとはどのようなところか。ドルポパとはどのような人びとか。美容師・ドルポ探求家・写真家である稲葉香（2020年、第25回植村直己冒険賞受賞、写真集に『ドルポ』彩流社、2022年）が撮影した珠玉の写真約40点をとおして、ドルポの現在をご覧いただきます。稲葉の写真には、ドルポの雄大かつ過酷な自然環境と、それによって培われたドルポパの逞しさと気高さ、厚い信仰心が映し出されています。ここでは「天界」という言葉が誇張とはいえないドルポとドルポパの姿を紹介します。稲葉がはじめてドルポを訪ねてから約20年がたち、この間にもドルポパのくらしは変容しつづけています。電気が村にいきわたり、数年前から上ドルポには中国側から車道が延び、夏にはバイクや乗り合いジープが走りはじめ、ヤクを用いた中継交易もほぼ消滅しました。歩くことが生きることであったドルポパのくらしは大きく変貌していますが、厚い信仰心とポン教の伝統は息づいています。

第 2 部 農牧・交易からなるくらし

ドルポのツァルカ村で調査した西北ネパール学術探検隊（1958年、川喜田二郎隊長）が収集し、民博が所蔵する資料約90点を展示し、半世紀前のドルポパのくらしを紹介します。隊員の高山龍三（1929～2019年）が「農牧商統合という生産様式」と指摘したように、彼らのくらしは農牧と交易から成り立っていました。ドルポの農耕は灌漑（かんがい）によるオオムギとソバの単作に限られ、収量も必要分に足りません。ヤク、ヤギ、ヒツジを季節に応じて異なる高度の放牧地で飼う移牧を行い、バターやチーズ、羊毛を交易品にしてきました。また、不足する穀物を補い、より大きな利潤を得るため、チベットの塩とドルポより南の村の穀物を交換する、ヤクを駄獣（だじゅう）とする中継交易を組み合わせてきました。農事歴と家畜の移動は密に統合され、ドルポパはヒマラヤ越えの交易民のひとつでした。

粉練り（1958 年）国立民族学博物館蔵

第 3 部 ドルポと日本人

チャム仮面（1968 年）武蔵野美術大学蔵

ドルポは1900年に河口慧海がチベットに潜入するため通過した土地です。2004年に慧海直筆の日記が発見されましたが、慧海が越えた峠がどこかは未だに謎でロマンをかりたてられます。慧海の後にも、西北ネパール学術探検隊（1958年）や西部ネパール民族文化調査隊（1968年）の日本人研究者が、入域が困難であったチベットの代替地としてドルポで調査をしてきました。第3部では、堺市博物館から借用した慧海の日記を含む著作、西北ネパール学術探検隊のデータカードや写真・著作、武蔵野美術大学から借用した、西部ネパール民族文化調査隊が収集した民具約40点と写真を展示します。もってドルポと日本人のかかわりが長いことを提示します。

第 4 部 生きぬくドルポパ

女性用の尻当て（2025 年、個人蔵）

1959年のチベット動乱による事実上の国境封鎖と中継交易の衰退、チベットにおける冬のヤク委託放牧の制限、安価なインド産塩の普及、国立公園化と資源利用の制限、冬虫夏草ブーム、道路の延伸など、ドルポは政治生態学的な動向に翻弄されてきました。こうした変化する社会環境にドルポパは、交易圏や生業の組み合わせを柔軟に変え、教育に投資するなどして対峙してきました。また、映画『キャラバン』（1999年／仏・ネパール・英・スイス合作／監督エリック・ヴァリ）のヒットなどを契機とした、外国人やネパール人が抱くドルポのイメージや共感を活かし、海外からの支援やトレッキング商売につなげてきました。冬虫夏草などの特用資源、ドルポ・イメージ形成の書物や映画ポスター・絵画、ドルポ女性を象徴する衣装一式やトレッカーが買い求める織物などを展示し、老練なヒマラヤ越えの交易民ドルポパが、しなやか、かつしたたかに時代の荒波を生きぬいてきたことを表現します。

開催概要

展示名	日本・ネパール外交関係樹立 70 周年記念事業 企画展「ドルポ――西ネパール高地のチベット世界」
会期	2026 年 3 月 12 日（木）～ 2026 年 6 月 16 日（火）
会場	国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博公園 10-1）　本館企画展示場
開館時間	10:00～17:00（入館は 16:30 まで）
休館日	毎週水曜日（祝日の場合は直後の平日）
観覧料	一般 780 円（660 円）、大学生 340 円（270 円）、高校生以下無料 ※（　）は 20 名以上の団体料金／リピーターは団体料金を適用 ※満 65 歳以上の方は、団体割引料金で観覧できます。年齢を証明できるものをご提示ください。 ※障がい者手帳をお持ちの方は、付添者 1 名とともに無料で観覧できます。「手帳」もしくは障がい者手帳アプリ「ミライロ ID」をご提示ください。 ※本館展示の料金でご覧いただけます
主催	国立民族学博物館
特別協力	武蔵野美術大学 美術館･図書館 民俗資料室
協力	堺市博物館、Dolpo-hair、公益財団法人千里文化財団
後援・事業認定	日本外務省、公益社団法人日本ネパール協会、公益社団法人日本山岳会、チベット文化研究会
協賛	（株）フェニックス・エンターテイメント・ツアーズ、（株）西遊旅行

関連イベント

■みんぱくゼミナール

「ドルポに魅せられて」

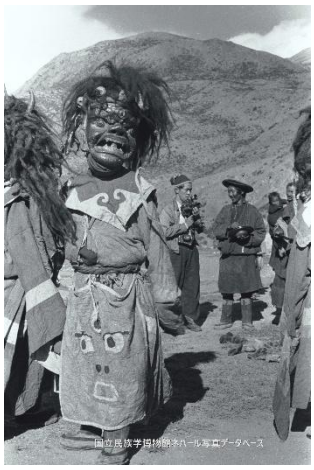
会場	国立民族学博物館　第 5 セミナー室(本館 2 階) 他、オンライン（ライブ配信）
日時	3 月 21 日（土）13：30～15：00（13：00 開場）
定員	①200 名 ②オンライン（ライブ配信）定員なし
講師	稲葉香（美容師・ドルポ探求家・写真家） 南真木人（国立民族学博物館教授）
参加費	無料（展示をご覧になる方は要展示観覧券）
内容	「2020年植村直己冒険賞」を受賞した稲葉香は、2007年から西ネパール高地ドルポの隅ずみを歩いてきました。ドルポの魅力とは何か、その研究史をたどり、そこに住む人びとのくらしや生き方をとおして考えます。

寺を巡る（2019 年、稲葉香撮影）

■みんぱく映画会

「秘境ヒマラヤ」（1960 年／大森栄撮影／西北ネパール学術探険隊監修／読売映画社・現㈱イカロス制作）

会　　場	国立民族学博物館　みんぱくインテリジェントホール（講堂）
日　　時	4 月 12 日（日）13:30～16:00（12:30 開場）
定　　員	350 名
司　　会	末森薫（国立民族学博物館准教授）
解　　説	南真木人（国立民族学博物館教授） 工藤さくら（国立民族学博物館特任助教・人文知コミュニケーター） 稲葉香（美容師・ドルポ探求家・写真家）
参 加 費	要展示観覧券（イベント参加費は不要） 事前申込制（先着順）※ 予約状況はイベント予約サイトでご確認ください。
内　　容	1950年代のドルポの様子を記録した貴重な民族誌映像を上映します。本作の鑑賞および解説をとおして、企画展で焦点をあてるドルポの地域的特徴や文化を深掘りします。



バクチャム（仮面おどり）を取材する大森栄（1958 年、高山龍三撮影） 国立民族学博物館ネパール写真データベース（C）

ドルポを撮影する大森栄（1958 年、高山龍三撮影） 国立民族学博物館ネパール写真データベース（C）

■みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

「ネパール探究〈探求＋研究〉――女性たちのフィールドワーク」

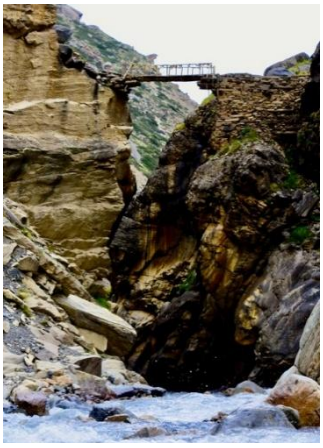
会　　場	国立民族学博物館　本館展示場（ナビひろば）
日　　時	3 月 29 日（日）14：30～15：30
話　　者	工藤さくら（国立民族学博物館特任助教・人文知コミュニケーター） 稲葉香（美容師・ドルポ探求家・写真家）
参 加 費	要展示観覧券（イベント参加費は不要）
内　　容	ネパールを旅する「探求家」と調査する「研究者」――ネパールというフィールドで何を目にして、どのようなことを感じているのでしょうか。ともに女性であるそれぞれの視点から、そこに住む人びとのくらしやフィールドワークについて考えます。

女性の機織り（2019 年、稲葉香撮影）

「ドルポと日本人」

会　　場	国立民族学博物館　本館展示場（ナビひろば）
日　　時	4 月 26 日（日）14：30～15：30
話　　者	末森薫（国立民族学博物館准教授） 稲葉香（美容師・ドルポ探求家・写真家）
参 加 費	要展示観覧券（イベント参加費は不要）
内　　容	ヒマラヤ最奥のドルポと日本のつながりは 20 世紀初頭にさかのぼります。仏教の原典を求めた河口慧海はこの地を通ってチベットに向かいました。また、1950 年代以降、数多の日本人がドルポを踏査し、その暮らしや習俗に魅せられてきました。日本とのかかわりを振り返りながら、ドルポの魅力をお話しします。

慧海が越境したと推測されるクン・ラ峠（5411m）（2016 年、稲葉香撮影）



慧海が「大渓流より百丈余の橋」ととえた断崖絶壁にかかる橋（2016 年、稲葉香撮影）

■ワークショップ

「道具から知るネパール高地の暮らし――ドルポの食文化体験」

会　　場	国立民族学博物館　本館企画展示場ほか
日　　時	2026 年 3 月 14 日（土）13:30～15:50（受付開始 13:00）
講　　師	南真木人（国立民族学博物館教授） 工藤さくら（国立民族学博物館特任助教・人文知コミュニケーター） 稲葉香（美容師・ドルポ探求家・写真家）
対　　象	小学校 5 年生以上
参 加 費	500 円（大学生・一般の参加者は要本館展示観覧券）
定　　員	10 名
参加方法	事前申込制（抽選制） ・イベント予約サイトの申込フォームにて 1 回につき 1 名の応募が可能。 ・応募期間：2026 年 2 月 4 日（水）10:00～2 月 19 日（木）16:00
内　　容	ネパール高地、ドルポ地域の人びとにとって身近な「粉練り」という木製の道具を実際に使って、そば粉のパンを作ってみませんか？道具を手にとり、動かしてみることでドルポの人びとの食文化を体験します。希望者には、チベット文化圏で親しまれている「バター茶」も試飲していただけます。

粉練りを使用する女性（2025 年、南真木人撮影）

■友の会講演会

「変わるドルポ――ポンモ村の半世紀」

会　　場	国立民族学博物館　本館 2 階第 5 セミナー室
日　　時	5 月 2 日（土）13:30～15:00（13:00 開場）
講　　師	南真木人（国立民族学博物館教授）
内　　容	ドルポとは西ネパールにある高地の地名です。2025 年 9 月、ドルポのポンモ（プグモ）村を訪ねました。そこは 1968 年に西部ネパール民族文化調査隊が住み込み調査をし、田村善次郎編著の『ヒマラヤ旅日記――ネパール ポンモ村滞在記』（2025 年）で描かれた村です。57 年前と今日を比較し、ドルポの変容について考えます。
定　　員	70 名
参加方法	① 会場参加（第5セミナー室） ② オンライン（ライブ配信）参加　※会員限定 ・会場、オンライン配信ともに事前申込制（先着順）。 ・友の会会員：無料、一般：500円 ※講演会終了後、企画展の見学会をおこないます。（要展示観覧券）
問い合わせ	国立民族学博物館友の会（公益財団法人 千里文化財団） 電話　06-6877-8893

仏塔門から入るポンモ（プグモ）村
（2025 年、南真木人撮影）

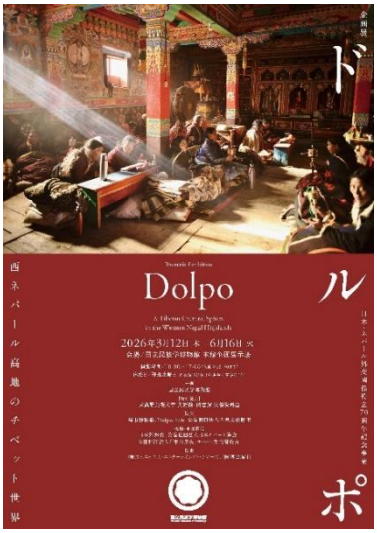
実行委員長　南　真木人

国立民族学博物館 超域フィールド科学研究部 教授 学術修士。1961 年北海道生まれ。同博物館助手を経て現職。共編著に『現代ネパールの政治と社会――民主化とマオイストの影響の拡大』明石書店（2015）、*Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus*（National Museum of Ethnology, 2008），共著に『南アジアの新しい波（下巻）――環流する南アジアの人と文化』昭和堂（2022）、『儀礼と口頭伝承』風響社（2021）、『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相――言説政治・社会実践・生活世界』三元社（2017）など。

プロジェクトメンバー

末森薫（国立民族学博物館准教授、2026 年 4 月～プロジェクトリーダー）
工藤さくら（国立民族学博物館特任助教・人文知コミュニケーター）
稲葉香（美容師・ドルポ探求家・写真家）
長野泰彦（国立民族学博物館名誉教授）

企画展「ドルポ――西ネパール高地のチベット世界」
広報用画像リスト

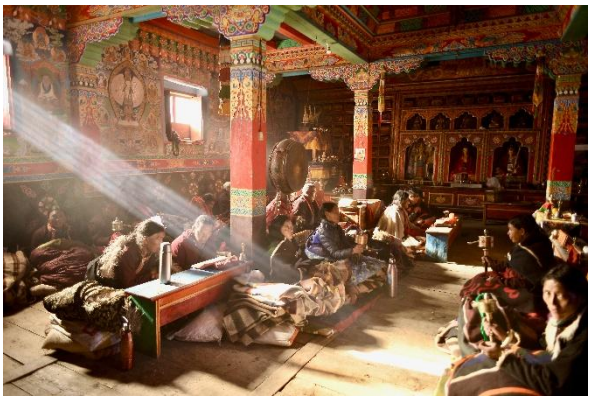


【1】企画展チラシ

【2】ヤクのキャラバン（2012年、撮影：稲葉香）

【3】シェ―山巡礼（2012年、撮影：稲葉香）

【4】越冬拠点地に選んだサルダン村
（2019年、撮影：稲葉香）



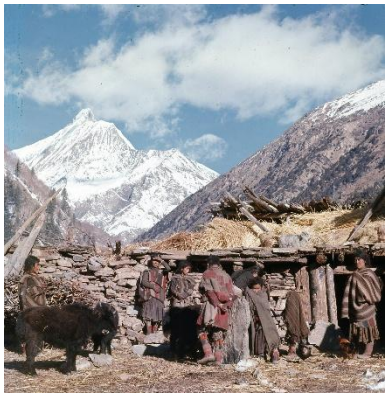
【5】冬の法要（2019 年、撮影：稲葉香）

【6】サルダン村の家族（2019 年、撮影：稲葉香）

【7】寺を巡る（2019 年、撮影：稲葉香）

【8】ありのままの美（2019 年、撮影：稲葉香）

【9】ソバ粉のパンを一緒にいただく
（2020 年、撮影：稲葉香）



【10】ポンモ村とカンチュンネ山
（1968 年、撮影：西部ネパール民族文化調査隊）

【11】キャラバン出発前にヤクを祝福
（1968 年、撮影：西部ネパール民族文化調査隊）

【12】チャム仮面（1968 年）武蔵野美術大学蔵

【13】粉練り（1958 年）国立民族学博物館蔵

日本・ネパール外交関係樹立70周年記念事業
企画展「ドルポ――西ネパール高地のチベット世界」広報用画像利用申込用紙

〔E-mailでお申し込みの場合〕koho@minpaku.ac.jp

〔FAXでお申し込みの場合〕　FAX番号:　06-6875-0401

【ご希望の画像番号】

【貴社・貴機関についてお知らせください。】

貴社・貴機関名	媒体名
ご担当者名	所属部署
ご住所　〒	E-mail
電話番号	FAX番号
ご掲載・放映の予定日が決まっている場合　　年　　月　　日	

【プレゼント用招待券】（ご希望の場合はどちらかにチェックを入れてください）

□ **３組６枚**　　□ **５組１０枚**

※チケット発送先が上記所在地と異なる場合は、下記にご記入ください。

発送先　〒

【広報に関するお願い】

■　写真使用に関するお願い、注意事項

・クレジットには次のとおり記載してください。

【2】～【9】写真：稲葉香　【10】～【11】写真：西部ネパール民族文化調査隊

【12】武蔵野美術大学蔵　【13】国立民族学博物館蔵

・写真（画像）のトリミングや改変、文字乗せはご遠慮ください。

・作品写真の使用目的は、本展の紹介のみとさせていただきます。なお、本展覧会終了後の使用はできませんのでご了承ください。

■　本館の基本情報等の確認のため、E-mailまたはFAXにて、掲載記事、番組内容の原稿等を下記連絡先でお送り願います。

■　お手数ですが、掲載紙・誌または録画媒体を2部お送りください。

［お問い合わせ］　国立民族学博物館　総務課　広報係

電話:06-6878-8560(直通)　　FAX:06-6875-0401　　E-mail:　koho@minpaku.ac.jp

プレス向けウェブサイト:www.minpaku.ac.jp/press